

## 自己愛の二面性に関する実証的研究

鈴木 英一郎

### 問題と目的

「ナルシズム」や「自己愛」という言葉は、日常でも、自分は特別な存在であるという信念を持っていたり、尊大で傲慢な態度で人と接したりしているような人のことを指して言うときによく用いられているが、そもそもはギリシャ神話の美青年ナルキッソスの話を基に、ある種の性的倒錯を示す言葉として使われており、Freud (1905, 1914) によって初めて本格的に理論立てて扱われるようになった概念である。

それから半世紀後、KernbergとKohutによってナルシズムの概念の推敲が進められる事となり、両者の自己愛人格障害についての激しい論争がきっかけとなって、近年さまざまな自己愛のサブタイプに関する理論が生み出される事となった（例えばBursten, 1973; Akhtar & Thomson, 1982; Masterson, 1993; Gabbard, 1994; Broucek, 1991; 岡野, 1998など）。またこうした理論に従えば、DSMで記述されている「自己愛性人格障害」は自己愛の病理に対する一面のみしか捉えていないということになり、実際これらの理論家たちによってそうした批判がなされている。こうした近年の理論の蓄積から、自己愛はDSMに記載されているような、自身の誇大感や傲慢さが表に出てくるタイプで、対人関係上の問題に対して鈍感で無関心な「無関心型」と、他者の評価に過敏で自己愛的な傷つきやすさが強く、傷つくことを恐れて閉じこもりがちになるタイプである「過敏型」という二面性の特徴をもつことが示唆される。このような自己愛の二面性について検討していく事は、特に恥を基調とする文化的特徴を持つ日本で自己愛の病理について考える際に、そして近年言われる様々な問題について自己愛という視点から考える可能性が生まれることを考えると、非常に有用であると思われる。しかし、これまで自己愛に関する実証的研究で用いられてきた尺度であるNarcissistic Personality Inventory（以下NPI）はDSMによる記述を基に作成された尺度であり、二面性という視点からの研究を行う上ではふさわしい尺度であるとは言えない。

そこで本研究では、新たに自己愛の二面性に関して同時に測定できるような尺度を作成し、その信頼性・妥当性について検討するとともに、自己愛の二面性と両親の養育態度との関連についての検討、および対人恐怖心性との関連を通して「ひきこもり」の自己愛的要因について考察を行った。

### 研究1

目的：「無関心型」自己愛傾向と「過敏型」自己愛傾向を同時に測ることのできる質問紙尺度（自己愛二面性尺度）の作成、およびその信頼性・妥当性について検討を行った。妥当性については、尺度全体として既存の自己愛尺度とある程度の正の相関が見られ、他者に対する意識との間では「無関心型」自己愛傾向では無相関または負の相関が、「過敏型」自己愛傾向では正の相関が見られ、自己顕示性との間ではどちらの自己愛傾向も正の相関が見られると予測された。

予備調査：研究1の本調査に先駆けて、公刊されたいくつかの事例研究の記述をもとに、50項目からなる自己愛二面性尺度予備目録を作成し、これによる質問紙調査を大学生37名（男性15名、女性22名）に対して実施した。その結果、天井・フロア効果を起こしていると思われた項目、被調査者より意味がわかりづらいと指摘があった項目などを不適切と判断して8項目を除外し、残った42項目を自己愛二面性尺度試作版として研究1の本調査に用いる事とした。

方法：質問紙法による調査を実施した。調査対象者は大学生214名（男性89名、女性124名、不明1名）で、予備調査をもとに作成された自己愛二面性尺度試作版をはじめ、自己愛人格目録短縮版（NPI-S; 小塩, 1999）、他者意識尺度（辻, 1993）、EPPS「自己顕示性」尺度（Edwards, 1953）を用いた。

結果と考察：1）自己愛二面性尺度の分析 自己愛二面性尺度試作版の各項目と総得点とのI-T相関、またNPI-S総得点との項目別相関より、新たに16項目が不適切と判断され除外された。その後残った26項目に対して最尤法による因子分析（オブリミン回転）の結果、19項目からなる2因子構造（「無関心型自己愛」因子と「過敏型自己愛」因子）の自己愛二面性尺度が構成された。またI-T相関や $\alpha$ 係数より、自己愛二面性尺度総得点および2つの下位尺度得点ともに十分な内的整合性を持つことが確認された。2）自己愛二面性尺度と他の尺度との関連 自己愛二面性尺度総得点および各下位尺度得点とNPI-S総得点の間には強めまたは中程度の正の相関が見られた。また他者意識尺度総得点との間には「無関心型自己愛」で弱い正の相関しか見られないのに対し「過敏型自己愛」で中程度の正の相関が見られ、EPPS「自己顕示性」尺度総得点との間ではともに中程度の正の相関が見られた。他者意識尺度総得点との関連

において自己愛二面性尺度の各下位尺度得点間に予測されたほどの大きな違いは見られなかったものの、これらの結果より自己愛二面性尺度の基準関連妥当性、構成概念妥当性について概ね確認することができたといえるだろう。

## 研究 2

**目的：**自己愛二面性尺度による「無関心型自己愛」、「過敏型自己愛」の各側面と、その両親の養育態度との関連について検討した。

**方法：**大学生149名（男性73名、女性76名）を対象として質問紙法による調査を実施した。用いた尺度は研究1で作成された自己愛二面性尺度、およびParker（1979）によるPBI日本語版（北村、1988）であった。

**結果と考察：**1) PBIの因子分析 PBI全25項目について、父親と母親を別々に因子分析（主因子法バリマックス回転）した結果、父親については「愛着・受容」因子と「自由・放任」因子とによる2因子構造、母親についてはこれらに「人格の否認」因子が加わった3因子構造が見られた。2) 両親の養育態度と自己愛二面性尺度との関連 男女全体では「過敏型自己愛」と「自由・放任（母）」との間にわずかながら負の相関が、また「無関心型自己愛」と「人格の否認（母）」との間に弱めの正の相関が見られた。母親からのポジティブな見守り方が「過敏型」自己愛傾向を抑制すること、そして母親の子どもに対する情緒的無視や共感不全が「無関心型」自己愛傾向に関連することが分かった。男子のみの結果では、「無関心型自己愛」と「自由・放任（父）」との間に弱めの負の相関が見られた。これより、女子と比べて男子では同性親である父親の影響が見られる事が推測された。女子のみでは男女全体の結果とほぼ同様の結果が得られた。しかし、自己愛傾向の両側面の異同という点からは積極的にその特徴の違いを挙げられるような結果を得る事ができなかったため、その違いの有無も含めて、今後の検討課題となるだろう。

## 研究 3

**目的：**「無関心型自己愛」、「過敏型自己愛」の各側面と対人恐怖心性との関連を検討することで「ひきこもり」に対する自己愛的要因の影響について考察することとした。

**方法：**研究2と同様の対象に質問紙調査を行った。用いた尺度は、研究1で作成された自己愛二面性尺度、および対人恐怖心性尺度（堀井・小川、1996）であった。

**結果と考察：**「過敏型自己愛」と対人恐怖心性尺度総得点、およびその各下位尺度得点のいくつか（＜自分や他人が気になる＞悩み、＜目が気になる＞悩み、＜自分を

統制できない＞悩み）との間に、正の相関が見られた。ここから「過敏型」自己愛傾向を持つ人が対人恐怖症的な心性を持つがために「ひきこもり」といった二次的症狀を引き起こしている可能性が示唆された。ただし、本研究においては重症対人恐怖との違いとして考えられている「加害関係妄想性の不明瞭ないし欠如」と「他者に対する罪意識の希薄さ」などの特徴については考慮できなかったことに加え、「ひきこもり」は対人恐怖心性以外の原因についても考える必要があると思われる、そうした点も含めながら今後引き続き検討していかねばならないだろう。

## 総合考察

研究1では、理論的には様々な人物によってあげられている自己愛のサブタイプ論、特にその二面性について取り上げ、それを実証的に検討するために新たに自己愛二面性尺度を作成した。実際、内的整合性、また基準関連妥当性、構成概念妥当性についてもある程度確認することができた。ただし、その作成過程において、はじめ50項目用意された項目が、最終的には19項目まで削除されてしまったことについて考えねばならない。特に「過敏型自己愛」を構成するという前提で作成された項目の多くについて「自己愛傾向を測る項目としてふさわしくない」とされ、意味内容として重要な項目が含まれていた可能性があるにも関わらず除外されてしまった。ここから本尺度の改訂版の作成についても考えていかねばならないだろう。

また、「回答していくことが不快だ」といった趣旨の意見を何人かの被調査者からいただいたことから、こういった種の病的傾向を扱う質問紙調査を行うことの被調査者に対するネガティブな影響について配慮することが必要であるとの示唆を得た。

さらに、本研究では両自己愛傾向と両親の養育態度との関連、そして対人恐怖心性による「ひきこもり」との関連について検討を行ったが、両親との関連ということでは、養育態度のみならず両親の自己愛傾向の影響など、その規定因の一つとして両親との関係についてさらに検討していくべきであろうし、「ひきこもり」との関連では、対人恐怖心性といった面のみならず他の「ひきこもり」の要因と考えられている概念との関連についても検討を加えていくべきであろう。

また、自己愛二面性尺度によって自己愛傾向を「無関心型」と「過敏型」の両側面から捉えることが可能となったことから、両側面の特徴を明らかにしていくとともに、他の臨床的な概念との関連についても今後検討を加えていかねばならないだろう。